

〔研究紹介〕

イギリス領マラヤの植民地行政におけるマレー人枠組みの形成

坪井祐司（東京大学大学院）

関心の所在

筆者の専門はイギリス領マラヤ（現在の半島部マレーシア、シンガポール）の歴史である。研究課題は、英領期の植民地行政における「マレー人」という枠組みの成立過程を解明することである。マレー人という種族（エスニシティ）概念および集団形成を歴史的に再検討することで、マレーシア社会の理解のために新たな視角を提示したいと考えているためである。

マレーシア研究において、種族は重要な分析概念の一つである。マレーシア社会は、マレー人、華人、インド人など複数の種族集団により構成されるとみなされる。この社会構造の起源はイギリスによるマラヤの植民地支配へと求められることが多い。上記の三種族集団のうち、華人、インド人の大部分は 19 世紀後半以降に労働者としてマレー半島に到来した人びとであり、植民地統治を通じて種族集団間での経済的分業がなされる「複合社会（Plural Society）」が成立したと考えられるためである。現在の種族とは個人の属性として明確な境界で区切られたものであるが、これ自体も英領期に導入された「人種（race）」概念がもとになっている。

特に、マレー人はマレーシアという国家体制内で特別な地位が認められていることもあって、憲法内でマレー人という概念が明確に定義されている。このことも、英領期に華人やインド人と比べて先住性を持つことを根拠にマレー人が優遇されたことに起因している。マレー人という集団概念に関する先行研究は少なくないが、植民地期から脱植民地化の過程を経て、バンサ（*bangsa*）という民族集団として凝集力を強めた経緯が特に関心を集めている[Roff 1994(1967), Ariffin 1993, Milner 1995]。

一方で、マレー（ムラユ）という概念は植民地化以前から存在しており、その内容は時期によって変化した。前近代研究では、マラッカ海峡周辺はマレー世界（*Dunia Melayu*）と形容され、マレー概念は地域を統合する文化的な核であった。ただし、海域世界であるこの地域では人口が稀少で社会の移動性が高く、その構成員はマレー人ばかりではなかった。このため、周辺地域の多様な出自を持つ人びとがマレー概念を利用して正統性を獲得しようと試みていた[Barnard(ed) 2004]。

それを考えたとき、植民地期におけるマレー人という集団概念は改めて検討する必要がある。元来多様性、流動性をもっていたマレー概念は、植民地統治を通じて概念化され、

境界が明確化されていった。これにより、集団形成のあり方はどのように変化したのか。人口の移動性の高かったこの地域において、社会の複合性は時代を超えてみられる特徴のように思われる。このため、集団形成の枠組みの変遷を通じてこの地域の社会変容を描くことが可能ではなかろうか。後の時代への連続性ばかりでなく前近代からの連続性をも考慮して英領期におけるマレー人という集団形成の変容を描くことにより、マレー半島における植民地統治の意味を明らかにしたいと考えている。

利用する史料および研究の視角

筆者が利用しているのは、イギリスがマレー半島への進出を本格化させた 1874 年から第二次大戦までのマラヤにおける植民地行政史料である。マラヤの植民地統治はマレー王権を通じた間接統治であったため、イギリスはマラヤの現地民としてマレー人を位置づけ、土着の社会秩序を維持しようとした。このため、教育、官吏登用、土地法制などさまざまな政策において、マレー人は優先的に扱われた。マレー人という枠組みは行政上の優遇を受ける資格となり、それに対して在地社会の側から働きかけがなされた。このため、マレー人枠組みを通じて植民地当局と在地社会が対峙することとなった。

英領マラヤは単一の政体ではなく州の連合体であるため、具体的な政策の運用過程を検討する場合には州を単位に描く必要がある。筆者が注目しているのはスランゴル州である。スランゴルは、1874 年の段階で土着の王権が植民地化を受け入れたため、植民地行政の制度化が最も進んだ地域の一つである。同州の行政記録がスランゴル州政庁官房ファイル (Selangor Secretariat Files, SSF) である。SSF は、スランゴル州の行政府が州内の諸機関や他の行政部局との間でやり取りした文書が集積されたものであり、州行政全般に関する年間数千におよぶ記録 (ファイル) が含まれている。

SSF のなかで重点的に利用しているのは現地の人びとから政庁に宛てられた陳情である。州行政のなかで植民地当局と在地社会との接点となったのは地方行政であり、植民地行政機構の末端で実務を担当していたのはマレー人の行政官であった。マレー人に留保された行政ポストに対しては、王権の有力者が自らの登用を求めたり、地域住民が候補者を推薦するなど、さまざまな形で働きかけがなされていた。それらの個々の事例を検討することで、従来の研究ではあまり扱われていない植民地政庁と在地社会におけるさまざまな行為者の交渉に焦点をあてることができると思われる。

スランゴルをとりあげた理由の一つは、同州がマレー半島のなかでも人口が少なく、植民地化以前から移民を受け入れていたフロンティア地域であったことである。スランゴルでは、イギリスによってマレー人とされた人びとのなかに、主としてスマトラやジャバに出自を持つ移民 (マレー系移民) が相当の割合で存在していた。華人やインド人の移民と比べマレー系の移民がとりあげられることは少ないが、スランゴルではマレー系移民が王権の称号を得ており、当局に対しても積極的に陳情を出すなど影響力を持っていた。スラ

ンゴルの事例は、従来の定着的なマレー社会像や固定的なマレー概念をめぐる議論を相対化するものにもなるのではないか。

英領期は、マレー人が人種として概念化され、そのうえでマレー人はマラヤの土着民であるという言説が成立した時期である。その植民地統治のなかでマレー系移民はどのような地位を占め、マレー人概念の形成にどのような影響を与えたのか。マレー人という概念のなかでは周縁的な存在とみられるマレー系移民に着目することで、マレー人という集団概念の変容に焦点をあてていきたいと考えている。

研究課題

筆者の具体的な研究テーマをいくつか挙げてみたい。

第一に、イギリスによる政策の基礎となったマレー人概念の成立過程である。それを明らかにするのは、マラヤにおける人口調査（センサス）やその他の人口統計である。マラヤにおける人口統計は、当初からマレー人、華人など人種範疇ごとにとられていた。これらの人種の諸範疇は植民地期を通じて一貫したのではなく、マレー人という範疇も徐々に変化していった。マレー人の概念化の過程は、マラヤの植民地としての制度化とそれにとまう当局側の在地社会に対する認識の変化と連関すると同時に、移民の定着傾向にとまう中長期的な人口構造の変化を反映したものと考えられる。そこには植民地統治の展開と在地社会の変容との間の相互作用が認められるのではないか。

第二に、植民地化の時点でのマレー人社会における集団形成のあり方である。19世紀末の植民地体制の構築にあたり、イギリスは土着の王権秩序に急激な変更を加えず、有力者を現地人行政官であるブンフル（Pengkulu）として行政機構の末端に組み入れた。SSFには、ブンフルの人事に関してイギリス人の地方行政官の報告や地元からの陳情などが多く含まれており、その内容からは当時の地方社会の様子をうかがうことができる。スランゴールにおいては、マレー系移民が出自ごとに集団を形成してバンサを自称しており、その首長のなかにはブンフルとして地域社会の代表者となる者も少なくなかった。そうした「マレー人社会」の構造を明らかにすることを試みたい。

第三に、マレー人概念が実際の政策の適用される過程である。20世紀にはいると、スランゴールを含む半島部諸州ではマレー人優遇策である「親マレー人政策」が採用された。代表的な親マレー人政策とは、マレー人官吏登用政策およびマレー人の土地の保護政策である。これらの政策を通じてマレー人概念が具体的に定義され、マレー人が土着的であるという思想が投影されていった。マレー人枠組みは行政上の権利を得るための資格として設定され、それに対して、マレー系移民を含む多くの人びとがその優遇策を受けるべく政庁に働きかけた。これらの政策の立案過程およびその運用過程は、現在のマレー人概念へとつながる要素を多く含んでいる。

第四に、政策のなかにマレー人という枠組みが成立したことで、地方行政にどのような

変化があらわれたかという点である。植民地行政体制が確立した 20 世紀初頭以降、プンフルをめぐる自薦他薦を含めた働きかけは急増した。その一方で、プンフルも地元生まれのマレー人であることが重視されるようになり、マレー系移民は排除されるようになった。しかし、移民集団はバンサとしての集団性を維持しつつもマレー人の代表者であるプンフルに対する働きかけを続けた。こうした移民集団の戦略を通じて、マレー人概念が定着していったといえるのではないか。19 世紀末の状況と比較することで、その変化が明らかになると考えられる。

人口稀少なスランゴルは、移民が流入、定着を繰り返すことで成立する開放的な社会であった。移民の側は、土地ではなく権力との結びつきを志向し、さまざまな規模の集団が首長を代表者として植民地行政に参加しようとした。それに対して、植民地当局はマラヤの現地民としてマレー人という枠組みを設定した。スランゴルの重層的なマレー人概念は、不均質な社会が植民地統治に適応する過程で成立した。マレー人概念の歴史的変遷は、この地域の社会形成のあり方を浮かびあがらせている。このことは、現在のマレーシア社会を理解するうえでも必要な視点なのではないか。

参考文献

- Ariffin Omar. 1993. *Bangsa Melayu: Malay Concepts of Democracy and Community*. KL: Oxford University Press.
- Barnard, T. P(ed). 2004. *Contesting Malayness: Malay Identity across Boundaries*. Singapore: Singapore University Press.
- Milner, A. C. 1995. *The Invention of Politics in Colonial Malaya*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Roff, W. 1994(1967). *The Origins of Malay Nationalism(2nd edition)*. New Heaven: Yale University Press.
- 坪井祐司. 2004. 「英領期マラヤにおける「マレー人」枠組みの形成と移民の位置づけ—スランゴル州のプンフルを事例に—」『東南アジア—歴史と文化—』 33: 3-25.